
ハイスクールD×D もうひとりの兵士 《ポーン》

葉っぱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D もうひとりの兵士^{ポーン}

【Nコード】

N1716Y

【作者名】

葉っぱ

【あらすじ】

イツセーの幼馴染神谷葉一^{オリキヤラ}が悪魔に転生してイツセーと一緒に暴れ回ります！

オリ設定

- ・リアスは僧侶と兵士のミステーションピースを持っていた
- ・イツセーの兵士消費は7
- ・オリジナル神器あり

オリ設定 ※ネタバレ注意（前書き）

一応最新の情報に更新しています、ネタバレになるかもしれないので気をつけてください。

第一話（前書き）

どうも、葉っぱです。

東方の小説を終わらせていないのも関わらずこんなのを始めてしまいました。

しかし後悔はしていない！ 東方創滅記はいま頭の中でどうやって完結まで持っていくか考え中。

第一話

午前8時

PIPIPIPIPI!

「こんな時間に誰だ？」

おれはアクション系のゲームの画面を見ながら携帯電話を取る。

名前は・・・イツセーか。

「どうしたイツセー」

『あ、葉一？　ちょっとおれんちに来てくれないか？』

おれは会話しながらも連続攻撃をやめずに続ける。

「あ？　家隣なんだから来ればいいじゃん・・・ま、別にいいけど・・・なにするんだ？」

『い・・・いいから来てくれよな！』

ツーツーツー・・・

・・・切りやがった・・・。

『You Win!!』

ゲームにはその文字が表示されていた。

「・・・仕方ない、行くか」

おれはゲームをセーブし、ダンスから服を取り出し着替え始めた。

ピンポーン

『はい、兵藤です』

この声はイツセーだな。

「おれだ、葉一だ、さっさと出てこい」

『ちょ、言葉があれじゃないか？』

「気のせいだからさっさと出てこい」

『わかった』

「で、おれに何の用事だ？」

おれはイッセーに話しかける。

「それが・・・だな・・・、今日デートなんだ」

「がんばれよ、じゃあな」

おれはそれだけ言って家に戻りはじめる。

ガシッ！

「話を最後まで聞いてくれ！」

「だったら回りくどいこと言わずささと本題に入りやがれ!!」

せっかくの休日だ、ゲー・・・勉強ゲームの時間を無駄にするわけにはい
かない。

「実はだな・・・お前のことが気になっている女の子がいるんだ」

「へー、変なやつがいるもんだな」

「その女の子はだな、おれの彼女の妹なんだ」

「おk、把握した。ようするにダブルデートをしろと、そういう

わけだな？」

「流石葉一！　話が分かる！」

「いつだ？」

「今日の午後1時だ、用意しておいてくれよ！」

「へいへい、わかったよ」

おれは身体の内側から込み上げて来る嬉しい気持ちを押さえつけながら家まで戻った。

おれにも彼女ができるのかなぁ・・・？

おれは部屋に戻りゲームの電源をONにしようとしたが、着ていく服を選びはじめた。

流石にダサイ服を選ぶわけには行かないからな。

10分ほど悩んで決めた服は黒を基調とした服だった。

午前10時

ピーンポーン

インターホン？　こんな時間に誰だ？

そんなことを思いつつおれは受話器を取る。

「はい、神谷です」

『おれだよおれ！　イッセーだよ！　行くぞ！』

「は？　まだ10時『女性より早く行くのがあたりまえだろ！？』
わかった、だったらそうしてやろう」

おれは一瞬でイッセーの意見に賛成した、理由はおれも彼女が欲しいからいい印象を残したいよね？

「ちょっと待ってろ」

おれはそれだけ言って財布をポケットに入れ、バックを取り家を出た。

おれが人間としてこの門をくぐったのは最後だった。

第一話（後書き）

どうでしたでしょうか？

お気に入りや感想をくれると嬉しいです。

第二話（前書き）

どうも、葉っぱです。

第二話です！ 今回はイツセーのデートを想像しながらオリキャラを交えてやって見ました！！

第二話

「なあイツセー、待ち合わせってどこだ？」

「あそこだよ、最近できたデパートがあっただろ？」

「ああ、たしか・・・駅前にあるグレなんたらってやつだな」

「グレモリーだよ」

「へー、よく覚えてるな」

ちなみにおれはゲーム以外の記憶力は乏しい。

「ほら、学校にリアス・グレモリーって人いるじゃん、あの人に関係あるらしいし」

ちなみにイツセーは女の子に関しての記憶力以外が乏しい。

『これどうぞ』

おれとイツセーは一枚の紙を受け取る。

『あなたの願いをかなえます!!』

・・・新手の宗教勧誘か？

「イッセー、この辺にゴミ箱は・・・」

「バックにでも入れとけばいいじゃん、早く行こうぜ」

「わかったからもう少しゆっくりと行かせろ、デートは逃げないぞ」

おれは走りだそうとするイッセーを押さえつつ待ち合わせ場所のデパートのところまで来た。

現在時刻は午前12時・・・普通だったら食事をするのだが・・・。

「まだかな～まだかな～」

・・・。

「イッセー、とりあえず飯食うぞ、デート中に腹の音が鳴ったら恥ずかしいだろ」

「あ、それもそうだった！」

「おまえはもう少し考えて行動しな」

おれたちは最寄のファミレスに入って食事を取った。

午後1時

「さて、集合時間なのですが・・・」

「来てないな」

周りを見渡そうと思ったがおれはイツセーの彼女の顔を余り覚えていない。

「イツセー君、お待ちせ!」

声が後ろから聞こえてきたので振り返る。

・・・二人ともかわいいな。

イツセーの彼女がどっちはわからんがこの二人のレベルならどっちでもいい!

まずは自己紹介だな。

「こんにちは、おれの名前は神谷葉一、コイツの幼馴染だ」

「初めまして・・・かな? 私は天野夕麻、イツセー君の彼女よ」

「その・・・初めまして、天野夕貴です、男っぽい名前ですけど女

です」

「えーと、夕貴ちゃんでもいいかな？ よろしく」

おれは手を差し出すと、夕貴ちゃんはおれの手を握ってきた、もちろんイッサー達も手を繋いでいる。

「それじゃあ出発だ！」

初デート開始です！

「よっしゃあ！ まずはゲーセンだ！」

「ゲーム世界の王と呼ばれるおれに勝てると思うなよ！」

おれとイッサーはレースゲームをしていた、このゲームはやりこみ度ではイッサーが、操作技術とかではおれが勝っているためいい勝負ができるだろう。

「イッセー君！ 勝ってね！」

「葉一さん！ そのままいっちゃって下さい！」

おれたちはそれに答えずに頷く。

残りは障害物ありの直線数百メートル、ここが正念場だ。

今の所おれがリードしているが直線のスピードはイッセーの方が上だ、ここはおれの技術の見せどころとなる。

「……覚えた！」

「え！？ 後ろ視点で走るの！？」

おれはイッセーの妨害をするために視点変更で後ろを見ている。

「葉一！ 妨害したら負けちゃうじゃないか！」

「お前の方がやりこんでステータス高いんだからこうしないと勝てないんだよ！」

おれはイッセーの妨害をしながら暗記している障害物を避けながらゴールに向かっていく、イッセーはおれの妨害で残り数メートルが詰めれないでいた。

そしてそのまま……。

『GOAL!!』

「葉一さん！ おめでとうです！」

「ありがとう夕貴。 イッセー！ おれの勝ちだ！！」

「くそ……このゲームなら勝てると思ってたんだけどな」

「次があるわよ、次は頑張ってね？」

「もちろんだよ」

「カーブがあるコースを選んだのが間違いないんだよ、おれのドリフト技術に勝てるわけないだろ」

「いや、それは装備補修でイけるかなと」

『あるえ、兄ちゃんたち可愛い子連れてるじゃないの』

『ちょっと貸してくれよ』

二人がおれたちの後ろにかくれる。

「残念だったな、いま『おれたちと』デート中なんだ、邪魔しないでもらえるかな？」

「そのとおりだ！ 夕麻ちゃんはおれの彼女だぞ！」

『ああん！ ちょっと楽しい事するだけだろうが、いいから貸せよ！』

「ぎゃっ！」

おれは夕貴に男が触れた瞬間動き出していた。

狙いは顎、一発で決める！

「おらぁ！」

バキッ！

『おごっ！』

名前も知らない男は後ろに倒れる。

夕貴はおれが殴った男のひるんだ隙を突いておれの後ろにかくれる。

『カズっ！ てめえふざけんじゃ「イツセー！」うおっ！』

おれはもうひとりの男に足払いをかけ、前に倒れさせる、それに合わせてイツセーが・・・。

「おらっ！」

ゴスッ！

肘うちを顔面に食らわせた、これでしばらく立つことはないだろう。

「それじゃあ行こうか」

おれとイツセーは二人にそう促し、別の場所に向かった。

『イツセー君、これとつてよ』

『あゝこれは難しい配置だねゝでも大丈夫！ おれに任せて！』

向こうでは二人がいい雰囲気になっている。

「夕貴、とってほしいものはないか？」

「あ……えと、あれが欲しいです」

そう言って夕貴が指差したのは黄色いクマ？のプーたんというぬいぐるみだった。

「よし、任せてくれ、ゲーム王のおれが取ってみせる！！」

おれは200円を投入し、クレーンを動かし始める。

……普通に掴もうとしたらクレーンが甘すぎて持って動かすことなんかできやしない、ここでおれがする最善の行動は……重心移動だ！

おれはプーさんの頭を掴む。

「あ・・・」

夕貴は失敗したと思っているようだ。

「ああ、これで大丈夫なんだよ」

クレーンが持ち上がり、プーさんの頭を落とす。するとその勢いでプーさんが穴に落ちた。

ポトツ・・・ポトン。

「わあ・・・！　ありがとう！　葉一君！」

「これぐらい簡単なもんですよ、向こうも終わったみたいだし行くか？」

「うん！」

葉一さんから葉一君か・・・距離が縮まったりしているのかな・・・？

喫茶店

おれたち4人は最近噂になっているパフェを食べに来た、かなりウマイらしい。

「あ、このパフェ4つと・・・みんな飲み物は？ あ、おれはコーラで」

「おれはコーヒーで」

「私と夕貴はカフェオレよ」

「む、おれだけジュースはなんかあれだな・・・店員さん！ やっぱりおれもコーヒーにします！ でも砂糖をたくさん入れてください！」

「・・・イッセー、それは『自分の味覚は子どもです』って言うてるようなもんだぞ？」

「でもそれがイッセー君の魅力なの」

「やっぱりそうだね！」

イッセーと夕麻は仲がいいな・・・、そろそろキスぐらいするんじゃないか？

「私も葉一君みたいにコーヒーはブラックで飲むことできませんからねー、うらやましいです」

そうして雑談しているうちにパフェとドリンクが運ばれてきた。

おれはとりあえずコーヒーの香り確かめ、口に運ぶ。

「・・・いいコーヒーだな」

「・・・」

「どうした？　夕貴」

「いっ・・・いえ、なんでもないです！」

なんか顔赤い・・・カフェオレが熱かったのか？　まあHOTドリンクの一覧だったしな。

「まあパフェを食べようじゃないか、おれはパフェを食べたことないから今日は誘ってもらって嬉しいぞ」

おれはパフェをスプーンですくい、食べる。

「あ、これはおいしいぞ、どんどん食べれるな」

おれはスプーンをどんどん口に運ぶ、すると・・・。

「急いで食べてるから口が汚れてますよ？」

夕貴ちゃんがおれの口をティッシュで拭いてくれた。

「あっ・・・ありがとう」

おれは顔が赤くなるのを感じた。

おれはそれをごまかすためにコーヒーを飲む、そして今度はゆっくりと食べ始めた。

午後5時

「あゝおいしかったな」

「そうね、また一緒に来ましようね」

イツセーと夕麻はいい雰囲気だ、あれなら次のデートも問題なく誘えるだろう。

「・・・夕貴、今度一緒に食事にでも行かないか？」

「・・・え？」

「いや、今日デートして楽しかったから・・・さ、また一緒にゴニョゴニョ」

「喜んで！」

「そ・・・そうか！ それじゃあアドレス交換しようぜ！ 行く日が決まったら連絡するからさ」

「赤外線ですね」

よし、夕貴のアドレスゲット！

「にしてももう夕方か・・・」

「時間が経つのは早いですね・・・」

昼間にここに来たのに今はもう夕方、暗くなるにはまだ時間があるが二人にも門限があるだろう。

「えーと、二人とも門限は大丈夫？」

「大丈夫ですよ、門限なんてありませんし」

「まじでっ!？」

おい、イツセー、反応しすぎだ。

「その、行きたいところがあるので行きませんか？」

おれたち二人はそれにこう答えた。

「「もちろん」」

第二話（後書き）

天野夕貴・・・オリキャラです。

お気に入り、感想をくれると嬉しいです。

第三話（前書き）

どうも、葉っぱです。

原作の最初の所に入りました。

第三話

おれたち二人は連れられて、町はずれの公園に来ていた、噴水があつていい公園なのだが・・・。

「あんまり人がいないな」

「そうだな、やっぱりこう言うところにくるとあれしかないですよ」

「あまり高望みはするなよ」

「もちろんだ」

イッセーの彼女の夕麻が噴水の前に行く。

「夕貴、おまえはここにいて大丈夫なのか？」

「うん、お姉ちゃんがここに來たがっていたから」

「ふーん、やっぱあれか？ キスでもすんのかな？」

「さあ？ お姉ちゃんの考えることを分かるわけじゃないからね」

「今日は楽しかったね」

夕麻が噴水をバックに言葉を出しはじめる、しかしおれはそれが恋人同士が出す雰囲気じゃないように思えた。

「ねえ、イツセーくん」

「なんだい、夕麻ちゃん」

「私たちの記念すべき初デートってことで、ひとつ、私のお願いを聞いてくれる？」

「な、何かな？　お願いって」

「死んでくれないかな？」

一瞬場の空気が凍りつく。

「・・・え？　その・・・あれ？　ゴメン、もう一度言ってくれない？　ちょっと緊張してて聞き取れなかったよ、はっはっは」

「死んでくれないかな？」

バサッ

夕麻の背中に黒い翼が生える。

「楽しかったわ。あなたと過ごしたわずかな日々。　初々しい子どもそのままごとに付き合えた感じだった」

ブウン

夕麻が手に何かを出現させる、おれはイツセーに向かって走り出した。

「うおおおおおおおおお！」

おれはイッセーに飛びつきそのまま転がる。

ドンッ　ゴロゴロゴロ　ドン！

さっきまでイッセーがいた場所には何かが突き刺さっていた。

「どうして、どうして夕麻ちゃんがおれを・・・？」

イッセーは倒れたままブツブツと呟いている。

おれは夕貴を見る、すると夕貴のほうにも黒い翼が生えていた。

おれはイッセーの腕を蹴って正氣に戻させる。

「イッセー！　今すぐ逃げろ！」

「・・・え？」

「こいつらはヤバイ！　今すぐ逃げて助けを呼んでこい！！」

「こいつらはおれがひきつける！　さっさとしろ！」

イッセーに向かって話しているとおれの頭の辺りに何かが飛んできたのを感じて横に飛び込みながらバックの中にあるペーパーナイフを取り出す。

おれが今することはイッセーに向いてる注意をおれに向けること！
時間稼ぎだ！

おれはペーパーナイフを夕麻の頭めがけて思いっきり投げる。

しかし、その攻撃は顔を少し掠めた程度で不発に終わった。

「ねえ、あなた私の気を引いてるみたいだけど・・・あなたも殺す対象なのよ？」

「なっ!？」

その言葉の意味を一瞬で理解したおれはイッセーの方を見る、すると夕貴が走り出したイッセーに槍を投げつけようとしているところだった。

「イッセー! 横に飛べ!!!」

しかしおれの声は届かず・・・イッセーの身体を貫いた。

おれはイッセーの方に走り出す、あの傷じゃもう治療は間に合わないだろう、でも親友を見捨てるわけには行かない。

ドスッ!

イッセーまで残り数メートル、そこでおれは倒れた。

「がっ・・・!」

おれの身体を槍が貫いたのだ。

くそ・・・親友に触れることすらできないのか・・・?

親友一人守れないのか・・・？

もっと力が欲しい！ 親友を守る力が！

おれは薄れ行く意識の中そう思った。

「あなたたちね、私を呼んだのは」

視界に誰かが映り込んだ。

「死にそうね、傷は・・・へえ、おもしろいことになっているじゃないの。あなたたちがねえ・・・。おもしろいわ」

「お・・・い、アン・・・タ」

「あら？ そっちは意識があるの？」

「そいつを・・・頼・・・」

おれの意識はそこで途絶えた。

「・・・どうせ死ぬのなら、私が拾ってあげるわ。あなたたちの命。私のために生きなさい」

『アサダゼ！ オキナイトゲームデータゼンブハカイスルゾ！』

ガバツ！

「それは困る！」

・・・最悪の目覚めだ。

「・・・また・・・あの夢か」

おれは階段を降り、一人で食事を取る。

ムグムグ・・・ムグムグ・・・ゴクン

「さて・・・行きたくないけど学校行くか」

おれは制服に着替え、イッセーを呼びに行くことにした。

「おーい、イッセー！ 学校行くぞー！」

おれは2階の窓に向かって叫ぶ。

ガラッ

「ちょっと待ってくれ！ 今行く！」

イッセーが2階の窓を開け、そう言って来た。

・・・まあ今行く言っても来るのは10分ぐらい後だが。

「行ってきます！」

イッセーはそう言って玄関から飛び出してきた。

「おっす、さっさと行こうぜ」

おれたちは学校に向かって歩き出す。

「ふわぁあゝ」

「なんだイツセー？ 夜更かしか？」

「ん、まあそんなとこだよ」

「先週からずっとだな・・・なんか楽しいゲームかアニメでもあったか？」

「いや、ただ眠くならないだけだよ」

「ならいいんだが・・・」

ちなみにおれは（ゲームのため）毎日2時ごろに寝ています。

「ところで宿題やってきたか？」

「あ！ 忘れてた！ 後で見せてゝ！」

「いいだろう、その代わり報酬としてドラグ・ソボールのDVDを貸せ」

「そんなことしなくても貸すよ」

そんなことを言ってるうちに学校に着いた。

第三話（後書き）

神谷葉一の神器が決まった気がする。

あ、お気に入りと感想をくれると嬉しいです。

第四話（前書き）

どうも、葉っぱです。

いろいろなオリジナルストーリーが入ってきてます・・・おかしくな
ってないよね・・・？

第四話

私立駒王学院……。

おれとイッセーが通っている学校だ。

現在は共学だが少し前まで女子高だったことがあり、男子よりも女子の方が多い、多分3倍〜4倍ぐあいなんじゃないだろうか？

まあおれとイッセーがこの学校に通っている理由だが……。

おれ……この辺で一番近い学校だったから。

イッセー……女子が多いから。

とまあ、まったく違う理由で通っている。

この学校の試験はかなり難関だ。

イッセーが中学最後の夏休みに勉強を教えてと転がりこんできたことを思い出した。

あの時のアイツの根性はすごかった、おれがゲームを本気でするときのオーラが出ていた。

まあ、学校の話はこの辺にしよう。

「よー、心の友よ。貸したDVDはどうだった？ エロかっただろ？」

おれとイツセーに声をかけてきたのは丸刈り頭の友人の松田だった。中学時代に数々の記録を塗り替えてきたのだが・・・写真部に所属している。

適材適所という言葉を知らないのだろうか？

「ふっ・・・今朝は風が強かったな。おかげで朝から女子高生のパンチラを拝めたぜ」

カッコつけて話しかけてきたのは元浜と言う友達だ。

メガネを通して女性を見ると体型を数値化できるらしい。

「いいもん手に入ったぞ」

松田がカバンを空け、中身を机の上に置いていく。

おれはパッケージだけで鼻血が出そうになっているため、水道に直行した。

ザバザバザバザバ（水道の水）

「・・・やっと止まったか、これどうにかならないもんかな・・・」

おれは顔を拭きながら教室に戻る、するとイッセーが二人にこう言っていた。

「夕麻ちゃんのこと、マジで覚えてないのか？」

ッ！？

まさか・・・コイツもおれと同じ夢を・・・？

「だからさ、おれらそんな子知らないって。一回病院行った方がいいんじゃないのか？」

「おれ達は夕麻ちゃんという女の子を紹介なんかされてない」

イッセーは首をかしげ考え込む。

「イッセー、その話放課後に詳しく頼む」

「え？ あ、葉一にはまだ話してなかったっけ？」

「ああ、放課後聞かせてくれ」

イッセーに何度も放課後にと念押しをしておく、これぐらい言っとなないとDVDのことで頭がうまるだろう。

「あ、リアス先輩だ！」

松田が叫んだためおれとイツセーは窓に駆け寄る。

覗きこんだおれの目に紅い髪がうつりこむ。

リアス・グレモリー。

この学校の三年生でおれたちの先輩にあたる。

周りの人たちは男女関わらず彼女の方を見ている。

「やっぱりキレイだな・・・」

イツセーがそう呟く。

それについておれが聞こうとした時彼女の視線がこっちをむいた。

「っ！！」

いきなりイツセーが驚いたような、そんな声のようなものを出す。

「おい、イツセー、どうした？」

「いや、何にもないよ、ただの気のせい」

もう一度窓から覗くと彼女はもうどこかに消えていた。

放課後

「おい、イツセー、帰るぞ」

「わかった、松田、DVDはまた今度な」

・・・・。 おれが放課後に話を聞きたいと言ってなかったら確
実に向こうに行ってたな。

学校を出てしばらく無言で歩き続け近くの公園に着く。

「さて、話を聞かせてくれ」

「わかった、でも・・・バカにしないでくれよ？」

「あたりまえだ」

おれがそう言うといッセーが話し始めた。

夕麻という女性に告白されたこと。

そして一緒にデートに行ったこと。

おれも夕麻の妹と一緒にダブルデートをしたこと。

そして……。

「街外れの公園で殺された気がするんだ、夕麻ちゃんの妹に」

「……その夢についてだが……」

イッセーは少し身構える、やっぱり馬鹿にされられているのだろうか？

「おれも見ている、記憶が残っている」

「っ！？ 本当か!？」

「ああ、おれも街外れの公園で……夢の最後に天野夕麻に殺されている」

「葉一、行ってみよう、その公園にさ」

「……もう午後5時だぞ？」

「今行かなきゃダメだよ、気になって眠れないし」

「わかった」

おれ達は公園に向かうことにした。

午後6時

「やっぱりこの公園だ、夢の最後にここに来ている」

「ここに何かあるのかな・・・？」

おれ達は自分が死んだ公園を探索している、すると茂みにあるものを見つけた。

「・・・これは・・・、おれのペーパーナイフ？」

おれはペーパーナイフを手取る。

「イツセー！ちょっと着てくれ！」

イツセーが駆け寄ってくる。

「どうした？」

「この公園に来るのは初めてだよな？」

「夢を除けば、だけどね」

「・・・これ、なんだと思う？」

「ペーパーナイフじゃないのか？」

「そうだ、ペーパーナイフだ、ただし頭に『おれの』がつくけどな」

「えっ？　　と言うことは！」

「ああ、おれ達はこの公園に来ている、そしてあいつらに殺さ『これは数奇なものだ。こんな都市部でもない地方の市外で貴様らのような存在に会うのだからな』」

「「っ！！」」

おれたちは身構える。

貴様らのような存在・・・どういうことだ？

「だれだおっさん、おれはアンタなんか知らねえぞ」

「いやいや、知ってもらわなくても結構だ」

バサッ！

おっさんの背中に黒い翼が生える、それを確認した瞬間おれたちは一目散に出口に向かって走り出した。

「イッセー！ 今の見たか！？」

「当たり前だ！ 見たくなかったよ！！」

あと少しで出口だ！

バサッ

「別にそんなに急いで逃げなくてもいいだろう」

出口が塞がれた。

「ぐっ・・・、おれたちに何の用だ」

「主の気配も仲間の気配もなし。消える素振りすら見せない。魔方阵も展開しない。状況判断からするとおまえらは『はぐれ』か。ならば殺しても問題あるまい」

おっさんの手に光の槍が形成される。

「イッセー！ 戻るぞ！」

「え？ でも出口・・・」

「この状況で逃げれるか！ さっさと戻るぞ！」

おれはイッセーの手を掴み噴水のほうに走り出した。

ヒュンヒュン！

ドスツドスツ！

「「っあああああああああ！！！！」」

おれの腕に光の槍が突き刺さっていた、かなり痛い。

「ぐっ・・・ああああ・・・」

イツセーは肩に刺さっているようだ。

おれの目から涙が流れ始める、妹と遊んでいるときによく怪我をしていたため痛みには慣れているはずなのだが涙が止まらない。

「痛かろう？ 光はおまえらにとって猛毒だからな。その身に受ければ大きなダメージとなる。下級悪魔と侮ったようだ、光を弱めた槍で十分だと思ったのだが・・・苦しみが長いようだ。次は確実に息の根を止めてやろう」

おっさんが光の槍を2本作り出す。

「負けてたまるかぁ！！」

おれはその辺に転がっていた石を掴み投げつける。

おれの石はおっさんの顔面に当たり、鼻血を流し始めた。

「ぐっ！ どうやらキミから死にたいらしい、だったら望みどおり
そうして

Bannon！

おれの目の前で爆発が起きる。

おっさんの手からは血が流れ出している。

「その子たちに触れないでもらえるかしら？」

「紅い髪・・・グレモリーの者か・・・」

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。この子たちにちよっかいを出すなら、容赦しないわ」

「・・・ふふっ、これはこれは。その者はそちらの眷属か。この町もそちらの縄張りというわけだ。今日のことは詫びよう。だが下僕を放し飼いにしないことだ。私のような者が散歩がてら狩ってしまおうぞ？」

「ご忠告痛みいるわ、この町は私の管轄なの。私の邪魔をしたらそのときは容赦なくやらせてもらうわ」

「そのセリフ、そっくりそちらに返そう、グレモリーの次期当主よ。我が名はドーナシーク。再び見えないことを願う」

おっさんはそれだけいい残してどこかに飛んで行った。

「二人とも大丈夫？」

「・・・イツセーがヤバイ、動いてねえ」

リアスという女性はイツセーの肩に触り何かをする、するとイツセ

「の肩の傷は塞がり顔色がよくなった。」

「次はあなたよ、見かけは平気な顔してるけど内側はもうズタズタでしょ？ 歩ける？ 一旦あなたの家に行って治療しましょ、ここじゃ難しいわ」

「〇丁目の〇ー〇だ、すまない」

「いいのよ、攻撃を受けて歩けるだけでもすごいわ」

「イッサーをリアスさんが担ぎ、おれが先行して家まで歩いて行った。」

「はぁ・・・はぁ・・・ぐっ！」

「槍の刺さった腕がどんどん痛くなって来る、視界も霞んできたぞ・・・。」

「おれはリアスさんを連れて家のリビングに来ていた、いまリアスさ

んが魔法陣を書いていて、おれはその真ん中で寝ている。

「あと少しだから頑張って、治療が開始されるまで耐えてちょうだい」

リアスさんが床に線を書き、全ての線がつながった。

「治療開始よ」

その言葉と同時に糸が切れた人形のように意識を失った。

第四話（後書き）

お気に入り登録・感想いつでも待っています！！

第五話（前書き）

どうも、葉っぱです。

もうすぐテストなので、更新遅くなります。

第五話

朝

「ん．．．？」

おれは目を開け起き上がる。

「なんでリビングで寝てるんだ．．．？」

周りを見渡す、するとイツセーとリアスさんが近くで寝ていた。

昨日の記憶が蘇る。

「そういえば腕大丈夫かな．．．？」

おれは袖を上げ、腕を確認するが、そこには傷一つない腕があった。

．．．お札になるかどうかは分からないけど朝ご飯つくろ．．．。

十数分後、テーブルの上には料理が並んでいた。

卵焼きに味噌汁、そしてプリン。

「・・・これ、葉一が作ったのか・・・？」

「プリンは冷蔵庫に作りおきしといたやつだ、ご飯派かパン派か分かんなかったからとりあえずご飯にしといた」

「あなたすごいわね、こんな料理が作れるなんて・・・」

「昨日助けてくれたお礼ですよ、まあ全く釣り合いませんがね」

「当たり前のことをしただけよ、あなた達は私の下僕なのだから」

隣でイツセーが下僕？と首をかしげている。

「・・・質問です、おれ達は、そしてあなたは何者なんですか」

「・・・今日の午後、使いの者を向かわせるわ、その人について行ってちょうだい」

「今は話せない、そう言うわけですね？」

「そのとおりよ」

「じゃ、べつにいつか、まあ食べましょう、学校に遅刻していいわけ考えるのも面倒ですしね」

おれたちは手を合わせる。

「「いただきます」」

イツセーが一旦家に帰り、学校の準備をする。

「あ、リアスさん、これどうぞ」

おれはリアスさんにあるものを手渡した。

「これは？」

「弁当ですよ、ここから家に帰って学校行ったら遅刻するから、お昼持って行けないでしょ？」

「ありがと、ありがたく受け取らせてもらうわ」

そう言ってリアスさんはカバンにおれが手渡した弁当を入れた。

「では行きましょうか」

おれとリアスさんはイッセーを迎えに行くことにした。

「行ってきます」

声が帰ってくることはない家だったが今日はなにか少しだけ嬉しく感じた。

「・・・で、イッセーはまだ準備ができてないと」

「そのとおりです、リアスさん。あと10分ぐらいかな？」

「もう少し早いんじゃない？5分」

「いえいえ、10分ですよ」

そんなおれの予想は驚くほど当たり・・・。

「10分58秒、おれのほうが近いから勝ちですね。途中で突入

しなければリアスさんの勝ちだったのに」

おれは学校に登校しながらリアスさんにそう言った。

「・・・次は負けないわ」

「なんか葉一仲がいいな」

「・・・これぐらいのコミュニケーションは普通じゃないのか？」

大体の人はこれぐらいコミュニケーションとるもんだと思うんだが・・・。

「会って1日の人にそれだけのコミュニケーションができる人は普通通いないわよ」

「・・・イッセーも何か話しないのか？」

「・・・周りからの視線が怖いんだ」

「・・・ああ、殺気だね。」

そうして歩いているうちに学校に着く。

リアスさんは少し急ぎ足で学校に入りながら言う。

「あとで使いをだすわ。二人とも放課後にね」

「わかりました」

おれはイツセーに軽く説明をして教室に向かった。

教室に入るとそこは別世界だった。

比喩とかそう言うもんじゃない、殺気がヤバいんだ。殺気だけで死ねそうだ。

「イツセー！葉一！どういうことだ！」

「おれ達は昨日まで持てない同盟だったはずだぞ！？」

「イツセー、とりあえずお前に話を聞こう、葉一じゃアッチ系の展開には絶対に持って行けないからな」

「うるせえ」

「そうだな・・・おまえら、一緒に寝泊りして食事をしたことはあるか？」

「うわあああああああ!!!!」

友人二人はその言葉で戦慄していた。

放課後

「やあ、どうも」

おれとイツセーの二人は目の前の男を見ていた。

「・・・」

イツセー、睨みすぎだ。

「えーと、木場さんがおれたちに用でも？ おれ達はあなたとあまり話さなかったと記憶しているのですが・・・？」

おれは場の空気を和ませるためとりあえず話しかける。

「ああ、そのとおりだけどね。今日はリアス・グレモリーの使いとしてきたんだ」

「ああ、そうでし「オッケーオッケー、で、おれはどうしたらいい？」」

機嫌治るの早いな、リアスさんの名前が出ただけで敵対状態をやめたぞ……。

「僕についてきてほしい」

「あゝ、わかった」

「やめろお!!! 勘違いを誘発するような言葉を……っでもう広まってやがる!!!」

カチカチカチカチ……

周りではもうケータイのメールを打つ音がひっきりなしに聞こえてくる。

二人はもうすでに前を歩き始め、後ろでは女子がメールを打っている。

「くそお! おれも行くぞこんちくしょー!!!」

おれはおホモだち疑惑が立つことも構わず二人のところに走り出した。

二人の後に続いて行くと、着いたのは校舎の裏手にある旧校舎だった。

「おいおい、こんなところでおホモだちな展開をしようだなんて思うなよ、やろうとした瞬間おれは自分の持ちうる全能力を使っても逃げ出すからな！」

『止める』んじゃなくて『逃げる』。これ重要。

「何を行ってるのかわからないけど・・・ここに部長がいるんだよ？」

「ハッハッハ、イイトコロニツレテキタネキバクン」

「なんでカタコトなんだ？」

「イッセー、こっちにも色々事情があるんだ」

命を助けてくれた相手だ、たとえおホモだちなやつがいてもリアス

さんを責める訳にはいかない。

おれ達は旧校舎に足を踏み入れた。

「なあ、旧校舎に七不思議の一つがあるのを思い出したんだけどさ、知ってるか？」

おれはイッサーと木場に話しかける。

「おれは知らないな、木場はどうだ？」

「んー、聞いた事はないね」

なるほど、だったら教えてやろう。

「確かおれが聞いた話なんだがな、夜中にここに入ると機械音が聞こえてくるんだ。機械音って言っても銃器を動かすとかそう言うもんじゃない。せいぜいPCの音程度だから気のせいとも考えられてるんだが・・・これが七不思議に入っているのはそこがある場所だからなんだ。そこは昼間は封鎖され、誰も入ることが出来ない

『開かずの部屋』なんだが夜中になるとドアが開くようになるらしい、そしてそこに足を踏み入れると・・・」

「どうなるんだ!? 葉一！」

「・・・」

「美少女がいるらしい」

「さて、一回昼寝しようかな。 11時に起こしてくれよ？」

「まあまあ、七不思議なんだしそんなことがあるわけないでしょ？
もうすぐ着くからそんなこと言ってないで歩こうよ」

「そのとおりだ、落ち着けイッセー」

「うるせえ！ おれは美少女に会うんだ!!」

そのあとイッセーと軽い喧嘩をし、圧勝した。

第五話（後書き）

オリ展開多いなく、これで大丈夫でしょうか？

第六話（前書き）

どうも、葉っぱです。

更新遅くてすいません！！ たった5話しかまだ登校してないのに
一ヶ月もあけてスイマセンでした！！

第六話

ズルズルズル……。

イッセーと軽い喧嘩をし、圧勝したおれはイッセーを引きずりながら木場について行っていた。

「さっきはすごかったね、一回も攻撃を受けずに倒したでしょ？」

「あたりまえだ、あのスピードの攻撃ぐらい余裕だ」

「……せめておぶってあげたら？」

木場はイッセーを指差しそう言ってくる。

「はぁ、わかったよ」

おれはイッセーを持ち上げ、肩に担いだ。 しばらくすりや目を覚ますだろう。

「……で、まだ着かないのか？」

「この廊下を曲がったらすぐだよ」

「りょーかい」

その言葉どおり、廊下を曲がってすぐのところに目的地はあった。

「リアスさんの気配がするな……、あそこか？」

「・・・よくわかったね？」

「なんかあれだ、気配を感じた。分からんのが二つほどあるけど」

「・・・ああ、関係者だよ」

「ふーん、そっか」

『う・・・ん・・・』

あ、起きたか？

おれはイッセーを下ろし、軽く揺する。するとイッセーは目を覚ました。

「はっ！ どうしてこんなところで寝てるんだ!？」

「さつき「おまえが錯乱してキャッホッホーウケレレレギュヒャーて叫んだからおれが軽く殴ったんだ、ごめんな」・・・」

本場の言葉にかぶせてイッセーを言いくるめることにした。

「ああ、なるほど、・・・おれそんなこと叫んでたの!？」

「叫んでないよ」

「おれの冗談だ」

「だ・・・だよな？ よかった」

「ま、目的地には着いたし・・・入りますか？」

「そうだね。部長、連れてきました」

『ええ、はいつてちょうだい』

おれ達は『オカルト研究部』と、書かれたプレートのある扉を開き、中に入った。

「葉一、この部屋どうなってるんだ？ 変な文字がたくさんあるぞ？」

「知らん、とりあえず静かにしてろ」

部屋の中にあるのは・・・。

よくわからん文字・・・いろいろたくさん

魔法陣・・・巨大な奴が一つ

ソファーとデスク・・・いくつか

「ん？ あそこに一人・・・」

ソファーに座って洋館を食べている女の子が一人・・・一年生の・・・塔上さんか。

イッセーは壁の文字を見ているためおれは先に自己紹介をする。

「どうも始めまして、神谷葉一です。向こうで壁の文字を見ているのがおれの親友の兵藤一誠です」

おれが頭を下げると、向こうも頭を下げてきた。

「あ、これどうぞ」

おれはバッグの中に入れているBOXからプリンを取り出す。

「・・・どうも」

よし、これで顔は覚えてもらえたかな？

「葉一！ こっちこっち！」

おれは声が聞こえたほうを振り向くと、イッセーがリアスさんたちと一緒にいた。塔上さんに集中して気付かなかったぜ。

おれがイッセーのところに行くと、リアスさんが話を切り出した。

「これで全員揃ったわね。神谷くん、イッセー」

「は、はい」「ども」

「私たち、オカルト研究部はあなたたちを歓迎するわ」

え？ 部活の勧誘？ おれ部活入る気0だよ？ ゲームの時間減るし。

「え、ああ、はい」

イッセー、お前は入るのか。

「悪魔としてね」

「・・・え？」 「・・・は？」

・・・どうやらおれの頭はやられたようだ。

「粗茶です」

「あつ、どうも」

「ありがとうございます」

おれはバックのBOXからお茶菓子は何個か取り出す。

「これ、食べてください」

おれは机の上にお茶菓子を置き、お茶を飲む。

「うまいです」

「おれもだ、お茶は苦手なんだがこれはうまい」

コーヒーなら好きなんだけどな。

「あらあら、ありがとうございます」

ポニーテールの女性がうふと嬉しそうに笑う。

「朱乃、あなたもこっちに座ってちょうだい」

「はい、部長」

なるほど、ポニーテールは朱乃さんか、覚えておこう。

全員の視線がおれとイッセーに集中する。イッセーはこっちを助けを求めるような表情で見ている。

「単刀直入に言うわ、私たちは悪魔なの」

「そ、それは単刀直入ですね」

「イッセー、さっきも悪魔として歓迎っていっただろ」

「信じれないかもしれないけどあなたたちは昨日黒い翼の男を見たでしょう？」

「ええ、それでリアスさんに助けてもらいましたね」

「あれは墮天使。元々神に使えていた天使が地獄に堕ちてしまった存在よ。私たちの敵でもあるわ」

ファンタジーなやつだな。 イッセーもそんな考えを持ってるに違いない。

「ファンタジーみたいですわね」

やっぱりな。

リアスさんはイッセーをみてニコリと笑うと話を続けた。

イッセー、顔を紅くするんじゃない。 あれは多分話の腰を折るなと言う警告のようなものだ・・・と思う。

「私たち悪魔は墮天使と太古の昔から争っているわ。冥界・・・人間で言うところの地獄の覇権を巡ってね。地獄は悪魔と墮天使の領土で二分化しているの。悪魔は人間と契約して代価をもらい、力を蓄える。墮天使は人間を操りながら悪魔を滅ぼそうとする。ここに神の命を受けて悪魔と墮天使を問答無用に倒しに来る天使を含めると三すくみ。それを大昔から続けているの」

「いやいや、先輩。いくらなんでもそれはちょっと普通の男子高校生であるおれには難易度の高いお話ですよ。オカルト研究部ってそういうこと？」

「その設定だけでいいゲームができそうだ」

「オカルト研究部は私たちの仮の姿よ。これは趣味で私たちは悪魔の集まりなの」

・・・まさかとは思うが・・・中二病がまだ抜けてないのか？

「天野夕麻、天野夕貴」

「「っ!？」」

「あの日あなた達はこの二人とデートしてたわよね？」

「イッセー、帰るぞ。いくら命の恩人でもその言葉を言われて黙ってはいられねえ」

「冗談なら、ここで終わってください、その話はしたくない」

おれはイッセーの腕を掴み蠟化に出るための扉に手をかけた。

「彼女たちは存在してたわ、確かにね」

扉を開こうとしたおれの手がピタリと止まる。

「どういうことだ、どうして知っている」

あの二人はイッセーが何度も坊主頭とスカウターに説明していたが全く覚えていない様子だった。

それなのにリアスさんが知っているだと？　どうなってんだ・・・？

「まあ、念入りに自分であなたの周囲にいた証拠を消したようだけ

どね」

リアスさんが指を鳴らすと写真を朱乃さんが取り出した。

イツセーはそれを見て言葉を失っていた。

「この子たちよね？」

俺とイツセーは頷く。

ケータイに残っていなかったものが今ここにある、どうしてだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1716y/>

ハイスクールD×D もうひとりの兵士《ポーン》

2011年12月20日21時47分発行